

拝啓「元フジテレビプロデューサー横澤彪」様

「横澤さんは、私にとって忘れられない印象深い人の一人です」

思えば、初めての出会いは『笑っていいとも』の前身の番組『笑ってる場合ですよ』の素人のコーナーのオーディションでしたね。

後々、ひょうきんディレクターズとかいって世間に顔

まで知られるようになった、それこそ、そういうディレクターーの人たちの一番はしで、影がうすく、目立たないように座っていらっしやいましたね。私たちがネタを

披露して、そのあと、後々ひょうきんディレクターーの山縣さん、三宅さん、荻野さんたちの、特に山縣

さんでしたけど、否定的な辛口なコメントを私たちが心の中ではムツとしながら聞いているとき、突然そのはしのほうから、私たちに言うてくださいましたね。

「君たちは売れるよ。いい。絶対売れる」。何せ三十年近くも前の話ですから正確には覚えていませんが、確かそういうニュアンスのことをおっしゃってくださいましたね。大変うれしかったです。

なにがうれしかったと言われれば、私たちのことを単刀直入に、はっきりと評価してくれたことがうれしかったですです。まわりくどく「いけるかもね」とか「可能性はないことはないかもね」とか、社交辞令のように言われたことはありましたが、はっきりと言われたのは初めてでした。私は横澤さんを、私たちを一番最初に評価してくれた人だと思っています。

事実、横澤さんの言われた通り、そのあと私たちは売れていきました。漫オブームという電車に後から飛び乗るかのようになり、売れていきました。今から考えれば、私たちがビックリするほどあの時あれほどはっ

きり言い切れたのも、プロデューサーとして売り出していく方法、道のりの筋書き立てがあつたことだつたと思います。そういう部分では、ほんとうに感謝しております。しかし、事実売れてから、そのあとグループとしてそれ以上伸びなかつたことには、少し申し訳ない気持ちがあります。

横澤さん、ここではっきり言わしてもらいます。横澤さんが単刀直入に私たちを評価してくれたように、私も単刀直入にあのときのことを、そしてなぜあのグループが伸びていかなかつたか、言わしてもらいます。

まず、あのグループは、私がいなかったら絶対に売れませんでした。そして、その私原因で、あのグループは伸びていかなかつたのです。これは私のおごりではありません、事実です。

あまり思い出したくないのです、細かく書きませんが、デビューして2年目を迎える正月番組での舞台の失敗で、私は精神的に落ち込んだのです。そして、フジテレビの楽屋前のクロークを逃げるように立ち去っていく私たちの背中に、横澤さんが大きな声で浴びせた「島崎、なにやってんだ」、あの一言で私は完全に自分を見失ってしまったんです。ステージに立つ、漫才をする、カメラの前に立つ、そういうことが怖くなるくらい、自分を見失ってしまったんです。一時はまだ売れたばかりだというのに、もうこの世界を去ることを考えていたほどです。

そういう部分で、あの時はメンバーにほんとうに迷惑をかけたと思っています。私がもう少し打たれ強ければ、私がもう少し精神的に図太ければ、あのグループはあのまま、当時のトップに立っていたかもしれ

ません。そういう勢いや可能性が、あの頃の私たちにはあったと思います。だからこそ、普段大きな声などめつたに出さない横澤さんが、思わず大きな声で私たちに怒鳴ったのでしよう。

勘違いしてほしくないのは、あの時、横澤さんがあんな大きな声で私たちを怒鳴らなければと私は言ってるわけではないのです。多かれ少なかれ、あの頃の私の心の持ち方では、そういったものはいずれきたでしょう。私が言いたいのは、私自身があの頃、私たちにあった、よくいう期待とか重圧とか、そういったものに、あの時点でもう押しつぶされていたということ。そして、そういった私の心の持ち方が、あのグループの可能性の芽を摘んだということです。たいへん私にとってはつらい思い出です。しかし、今から考えればたいへん貴重な体験をしたと思っています。いろ

いろいろな葛藤が何年もの間、私にはありましたが、あの体験によつて、私は芸人としての根本的な生き方や考え方が、私の体に、身にしみるようになっていたと思つています。今の私に、もし芸風というものがあつたならば、あの時の体験なしでそれは語れません。大きなチャンスは逃がしたような気がしました。が、そのかわり、この世界で生きていくための貴重なスピリットを教わつたような気がします。

横澤さんはよく「できあがつた自分や、できあがつた形を壊さないと、新しいものは生まれえない」みたいなユアンスのことを言われていましたね。まさしく私にとつて、あの体験は自分が望んだことではなかつたのですが、結果的にはそうなつていたちよつうな気がします。たしかに一時、私は自分というものが完全に壊されてしまいました。そういう意味でも、また感謝して

おります。

時代が変わり、あの頃お祭りのようにワッショイ、ワッショイとやっていた仲間たちもみんな肩書きが変わり、環境が変わり、タレントによっては、どこで何をしているか分からないような人たちまでいます。いろんな人たちの集まりで、あの時代が作られていたわけですが、そのなかでも特に、横澤さんは私にとってもっとも忘れられない、印象深い人の一人です。お体に気をつけて、まだまだ自分に挑戦し、戦い続けてもらいたいと思っています。